

インタビュー

多様化する時代に建築家はどう対応すべきか (1)

職能を広げれば建築家はより高付加価値の住空間を生み出せる

大島 芳彦 (建築家)

若い世代を中心に多様な住まい方の模索が進んでいる。そうしたなかで建築の枠を超えて不動産や金融と価値観を分かち合いながら協働し、多様化する住まい方にふさわしい住宅を提供している集団がある。これからの建築家の職能のあり方や他業種との協働の仕方などについて、ブルースタジオの大島芳彦氏に2回にわたって話を伺った(編集部)



大島 芳彦 (おおしま・よしひこ)

1970年東京都生まれ。建築家。大手組織設計事務所勤務を経て2000年、ブルースタジオにて遊休不動産の再生流通活性化をテーマとした「リノベーション」事業を開始。その活動域は建築設計にとどまらず企画、コンサルティング、グラフィックデザイン、不動産仲介管理など多岐にわたる。団地再生など都市スケールの再生プロジェクトを手掛ける一方、個別の物件探しからはじめる中古住宅のワンストップリノベーションサービスを展開。近年では公益施設、商業施設の再生も手がける。リノベーションスクールの実績により2015年「日本建築学会教育賞」を受賞。一社) リノベーション住宅推進協議会理事副会長。一社) HEAD 研究会理事、リノベーション・タスクフォース委員長。

建築家の職能はつくり方のデザインから 使い方のデザインへ

私たちブルースタジオの活動には2つの基本的な理念があります。1つは建築家の職能の変化です。建築家の果たすべき役割は、時代の変化によって今までにない側面が生まれてきています。これまで建築家の職能が“つくり方のデザイン”を中心に担ってきたとすれば、これからの職能はむしろ“使い方のデザイン”を担うことになる、それが建築家の職能のパラダイムシフトであると考えています。

不動産の使い方のデザインを建築家の職能の第一義とすると、対峙するプロジェクトに採るべき手段は新築、建替えという選択肢以外にも既存活用や用途変更あるいは増築・改築という可能性も生まれてくる。今まではゼロベースでそこに何かをつくる新築が前提でしたが、これからの人口減少社会ではその前にまず使い方ありきでつくることを考えるようになるのではないかと考えています。

私たちのもう1つの理念は「物語のデザイン」です。物語という言葉の背景には「物件」という言葉があります。物件と物語はどちらも漢字2文字の言葉ですが、物の後に「件」が来るのか「語」が来るのかの違いです。「物件」という言葉は建物や不動産、建築を取り巻く言葉の中では非常に頻りに口にされる言葉です。これは建築家だけでなく建設業者や不動産業事業者、生活者、金融機関もそうですし、インテリアの空間もそうです。建築・不動産に関わる人たちは「物件」という言葉を非常に頻りに使います。

この物件という言葉を使う人たちの職能は多岐にわたりますが、それぞれの人が頭に描いている「物件の価値」は皆違う方向を見ていることが多いと思います。

一番身近な生活者にとって物件の価値は「生活の価値」そのものです。例えば、賃貸住宅を探している人は、自分の暮らしを夢見ながら探しに行きます。ところがそれが事業用の建物になれば途端に不動産商品に変わり、不動産事業者からすると物件の価値は「商品価値」になります。また、それを設計した建築家の立場からすると、すべての建築家がそう思っているわけ

